

第 424 回 千 葉 医 学 会 例 会

第 11 回 千 葉 皮 膚 科 臨 床 談 話 会

1965 年 3 月 28 日 於千葉大附属病院

1. 口唇癌を伴った色素性乾皮症

田 辺 義 次

患者 22 才男子。生来、色白であった。数年前より顔面に雀卵斑様色素沈着が出現、徐々に増強。1 年前、下口唇に小豆大腫瘤生じ、半年で拇指頭大までに増大。家族歴として、両親は従兄妹同志、患者の妹も本疾患を充分疑わせる。一般検査成績は特に異常なく、尿中コプロポルフィリン追時定量では正常の約 2 倍の結果を得た。生検所見は、Broder I~II 度, prickle cell carcinoma. 術前 1 週間で合計 3,000 mg のエンドキサンを carotid arterial infusion にて投与し、腫瘤を広汎に切除。術後 3,000 R 照射。

討 論

竹内教授; エンドキサン局注は初めての例である。

2. 顔面播種状粟粒性狼瘡の 2 症例

加 藤 友 衛

症例: 1) 39 才, 女。2) 28 才, 男。1) 2) とも前額, 下眼瞼, 頬部に、ほぼ対称性に、留針頭大から小豆大の、紅褐色の丘疹散在。一部、瘢痕化せるものも認められた。1) 2) とも血沈値軽度亢進, ツベルクリン反応陽性。組織所見は、1) には定型的結核性肉芽腫, 2) には、真皮全層に亘り、リンパ球、形質細胞、線維芽細胞、類上皮細胞、若干の巨細胞から成る細胞浸潤が認められるが、乾酪変性は認められなかった。また 1) には上皮性のう腫が認められた。以上 Lupus miliaris disseminatus faciei の 2 例を報告した。

討 論

竹内教授: 最近は少くなって来た。

鈴木・大隅・石田・山崎ら: 最近みていない。

今井: 治療は SM, INAH で 1 年位かかっている。

西原: 3 者併用は効かなかった。丸山ワクチンで、全例治癒している。

山崎: 私も同様で、1 年程度である。

3. Cornu cutaneum を伴える lupus vulgaris の一例

市 川 浩

72 才女子。約 30 年前、眉間に紫紅色丘疹数個を生じ、漸次顔面全体に波及、鼻背・頬部では地図状不整局面を形成。自覚症状なきまま放置せるところ、約 10 年前から瘰癧状潰瘍性変化により鼻部脱落、さらに約 2 年前より増殖性機転によって、数個の皮角様変化・左頬部花菜状腫瘤形成など高度の醜形を呈するに至った。1965 年 2 月 8 日入院、翌日プロカイン・ショックにより死亡。組織学的には定型的結核結節のほか、角化性乳頭腫の像が認められた。剖検所見では肝・脾・リンパ節など諸臓器に結核性変化を見いだした。

討 論

山崎: 以前に Pc を注射した患者に、プロカイン・ショックが起った例を経験している。

石田: 看護婦がプロカイン・ショックを起したことがある。同人は、手の皮膚炎・じん麻疹を起したことはない。

4. 白血球減少を呈した白血病性紫斑の一例

高畑憲蔵・高久 昇 (旭中央病院)

43 才の男子(農業)で、1964 年 9 月頃より全身に点状の紫斑が散在せるに気付くも、本年 1 月末まで放置していた。然し、徐々に全身倦怠感が増強して来たので内科を受診 2 月 10 日に入院した。

入院時所見: 体格、栄養中等度。浮腫なく貧血軽度心肺に異常を認めず。腹部に於て、肝脾とも中等度に腫大し、特に脾は臍高に達す。紫斑は点状のものが全身に散在しているが、大腿部にやや密で斑状出血も 2~3 コ混在していた。その他、球結膜、歯齦よりの出血も伴ったが、死亡 1 週前に至り大量の